

『原爆供養塔』

2016年06月30日

第47回大宅賞を受賞した堀川恵子氏の『原爆供養塔 忘れられた遺骨の70年』を体に痛みを感じるような思いで読んだ。堀川氏は広島生まれのジャーナリストで、ノンフィクション作品を執筆し、多くの賞を受賞している。

広島平和公園の中に「原爆供養塔」がある。直径16m、高さ3.5mの小山のような塚は、表面を芝生に覆われ、緑のお椀を伏せたような形で、地域の人々は「土饅頭」と言っている。地下に、原爆で亡くなった7万人の遺骨が納められている。もちろん、7万人という数字は確かなものではない。原爆が投下された時の死者数も諸々の説があり、現在は14万(±1万)人と言われている。死者数を概数で表す原爆被害の異常さが分かる。

当日の広島の惨劇は、まさに地獄絵であった。原爆死は肌が焼かれた火傷で苦しむだけでなく、放射能によって体が破壊され、「痛い、痛い、骨と身がはずれるよう!」と叫び、激痛の中で死んでいく。正視できない惨状を報告している。

死者は町中に累々と横たわり、集めて油をかけて焼いた。焼くことができない遺体は、そのまま土に埋められた。それらの遺骨をお寺や役所に集めた。多くて対処できなくなり、「原爆供養塔」を作り、収骨した。身元不明の無縁仏の供養塔である。

『原爆供養塔』は佐伯敏子さんという女性を中心である。1919年に生まれた敏子さんは小さな体で生まれ、小柄であったが、元気な子どもであった。貧しくて苦勞をするが、20歳の時に、心優しい佐伯氏と結婚し、広島で生活する。そして、3人の息子に恵まれる。

原爆投下の前日、子どもを預けた親戚の家を訪ねて泊まる。翌日、一発の爆弾で広島が吹き飛んでしまう。急いで、広島に戻るが、家族、親戚の13人の死を知り、遺骨探しに奔走する。当然、被爆した。首が持ち込まれ、つけ鬚と眼鏡から母であることを確認する。彼女は自分だけが助かり、家族を守れなかった深い慙愧の思いに捉われる。それが、その後の彼女の生き方を決定した。「土饅頭」に引き取り手のない遺骨があることを知り、毎日、掃除に行き、被爆体験の語り部になる。彼女は「広島の大母さん」と言われた。遺骨の多くは山積みされているが、名前と住所が書かれているのもある。彼女はノートに書き写し、遺族を探し、遺骨を届けることを始める。何の利益もない。ただ、遺骨を遺族に届けたい一心でやり続ける。その時の思いを日記に「義父や義母も、この安置所の中で私たちを待っていてくれたように、お迎えを待っておられる方々のことを思うと、毎日の掃除そのほかのことに心急がずにはいられなくなってしまいました」と書いている。こんな人がいるのだろうかと驚き、ただ敬服する。獅子奮迅の働きで、10人くらいは届けることができ、涙を流さんばかりに喜ばれた。しかし、遺族探しは容易ではない。間違いが多く、探し当てた人々も多様な対応をするからである。

著者の堀川氏は敏子さんの働きを受け継ぎ、名前と住所が記された815柱の遺族を探す旅を続ける。少年特高兵が、死に逝く人々から聞いた記録も正確ではない。朝鮮から来た人々は日本名を名乗り、本名が分からない。名前の付いた服から、それを着ていた人を被爆死者としたが、服は盗まれたもので、本人は生きていた。70年も経てば、地名も違い、転居していたりするので、なかなか探し当てられない。プライバシーの壁もある。

これほど、死を見つめ、死者の思いに寄り添おうとする人たちの一途さに心打たれた。堀川氏は「あとがき」で「戦後70年という節目を機に改めて、市井の人々が受けた痛みを知り、それを相手が受けた痛みへと重ね、あらゆる側面から戦争の周辺にある『記憶』と『事実』を冷静に見つめ直すまなざしが必要です」と書いている。